

小田 健人
(おだ けんと)

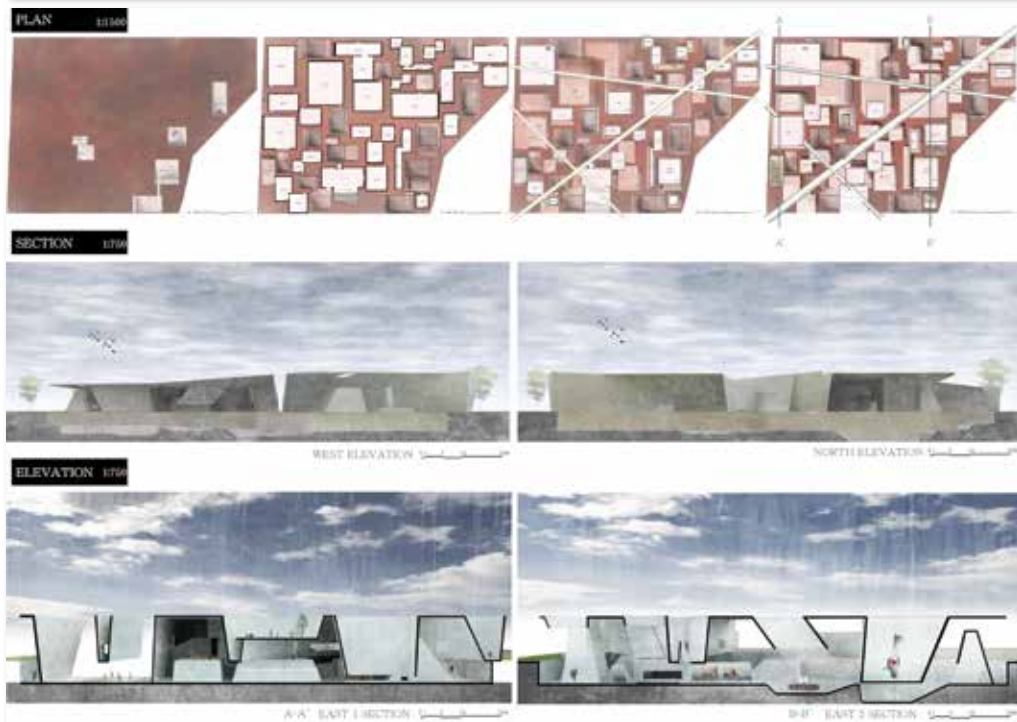
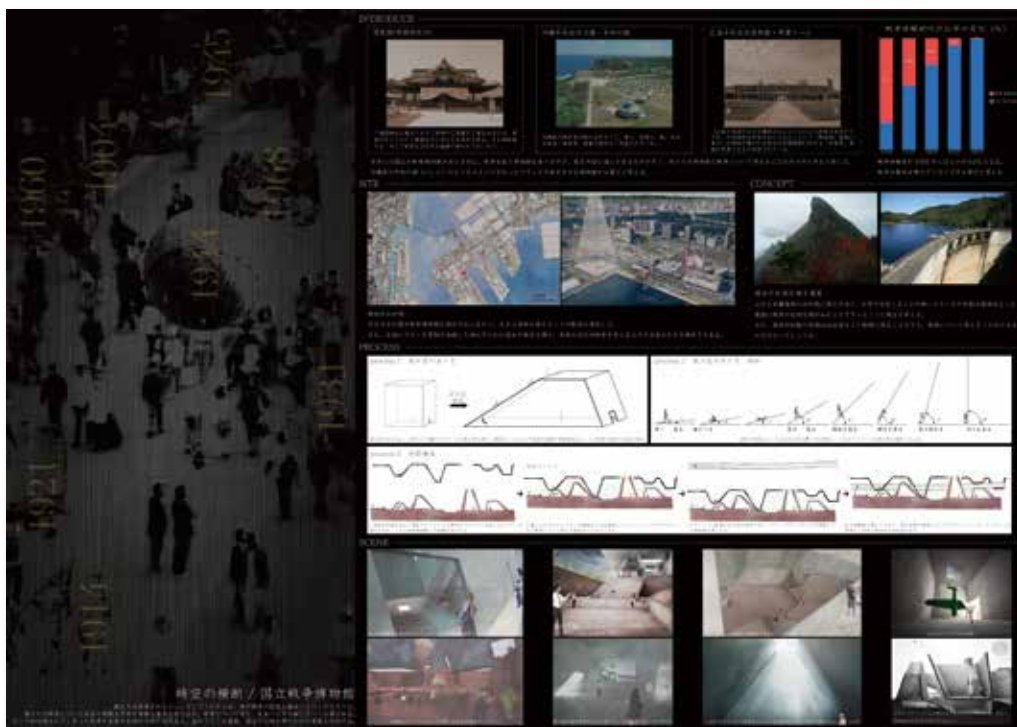
東京理科大学
理工学部
建築学科



僕たちは戦争を知らない。そしてこれから先、誰が戦争の記憶を継承していくのだろうか

日本には国立の戦争博物館がない。戦争を扱う博物館はあるが、展示内容に偏りがあるものが多く、私たちが博物館で戦争について考える上では不十分であると感じる。沖縄県の平和の礎（いしじ）のようなスタンスをもったフラットな展示をする博物館が必要だと考える。

僕たちは戦争について有益な情報も不利な情報も事実と受け止め、戦争について考え、未来へと引き継いでいく必要がある。そこで私は埋もれてしまった戦争の光景や記憶が日常に垣間見え、溢れててくる建築、過去の記憶を残すための建築を設計する。



講評

水平に広がる複雑で巨大なヴォイド空間である。屋根と地表の二つのサーフェスが対峙している。空中に浮かぶプレートの、筒状の開口や切込み軸の開口より光が大地に導かれ、一方大地は丘陵のように隆起し、射し込む光が斜面に思わぬ陰影を作り出すであろう。人々は連なる丘のあいだを自由に歩きまわることになる。視界は開けて遠くまで見渡すことができ、めまいを覚えるような壮大なランドスケープが広がる。大半が半外部空間なのであろうが、それがより荒々しさを感じさせ、まるで古代遺跡の発掘現場のようでもある。フラットな床だけではなく傾斜を設けて身体で感じる空間としたことは、おそらく太平洋戦争の史実を伝えつなげるための展示に忘れ得ないインパクトを与えたかったのではなかろうか。

丹下健三による広島平和記念資料館は、景観軸を用いた計画により都市的スケールをもつ構想となっている。本提案もより深く歴史の視点を追求し、都市との関係を高めるべきだったとも感じる。それでも作者の持つ空間のスケールやフォルムの感性は大胆で、延々とめぐる体験ができる空間は特筆に値すると考えている。

(審査委員：佐久間 達也)